

令和5年度旭川未来会議2030 文化分野 第4回分野別会議 会議録

- 1 開催日時 令和5年10月4日（水） 午後7時～9時
- 2 開催場所 旭川市第三庁舎 1階会議室
- 3 出席者（参加者） ※敬称略，五十音順
小沢 和雄，佐藤 真由美，柴田 望，野口 博人，東方 鳳山，山田 雅紘
- 4 出席者（市側）
（運営事務局）
文化振興課 坂本課長，松里文化ホール担当課長，小川主査
（統括事務局）
広報広聴課 乙坂広聴係主査
- 5 会議の公開・非公開 公開
- 6 傍聴者 なし

7 会議概要

はじめに，事務局から本日のテーマ「報告書の作成」について説明した後に，次のとおり議論が交わされた。

（参加者）

まずは，スライド全体の記載内容についてお話しする。

最初の「背景」は皆さんから発言が出た部分がすごく盛り込まれていると思う。そして「問題点」の大きなところは「団体の高齢化が進んでいる」とことと、「会員数の減少」。また、「文化芸術が盛んなまちだと感じられていない」というところがある。「問題点」のまとめを4ページにして，イラストを入れていただいている。

次に「提案」のコンセプトとして，「暮らしに文化，デートも文化」と「文化は世界の共通言語」と二つあるが，一つにするのもありなのかなと思う。内容を切ってしまうと，もっとたくさん会議していなかったのかと思われるのも癪なのだが，時間もないので，一つに絞るというのも検討の余地がある。一番大事なところが「取組の方向性」だと思う。あべさんが四つ葉のクローバーにして，このように描いてくださって，素敵な画面になっている。

その取組の方向性について，一つ一つ説明していくのが8ページと9ページで，情報発信の強化，施設の整備，分かりやすく伝える工夫，アーティストの交流促進の四つである。その次に，ここでいうところで，この芸術マルシェが出てくる流れだ。具体的取組ということで，説明の前にイラストが出てくるのだが，ここで良いのかどうかという部分もある。芸術マルシェの中身，事業内容，ターゲット，実施方法など，これを全部読んでいくわけではないと思うのだが，一番

大事なところを中心に話しながら、画面が変わっていく。

13ページが、また先ほどの論点の再確認になると思うが、情報発信の強化、施設の整備、分かりやすく伝える工夫、アーティストの交流促進と、この四つがまず軸になる。その実現のためにも芸術マルシェをやってくという説明になる。

一番最後のページとして、文化芸術の未来の芽を育てていくというイメージのイラストを表示して終わりにする。現在の案では、新しく何かを始めようとか、団体を新たに設立しようという方に、発表のチャンスであるとか、必要な情報提供とか、そういった支援ができる場として、芸術マルシェが育っていくことを期待するというような今後の展望を述べて締める形になる。

この最終ページのイラストについては、芸術マルシェの説明よりも前に置いて、文化芸術の未来の芽をまち全体が大切に育てて、心の表現を大切にする、そんな「暮らしに文化」という、日常の街づくりが実現していく説明をした上で、そのためにも、市民芸術マルシェの創設を提案させていただきたいという流れで逆に説明するのも良いのかと思う。

以上、ざっと説明しましたが、結構ボリュームがあるので、10分では足りないのではないかなと思っている。もっとこうした方が良いという御意見があれば、お願いしたい。

(小沢委員)

イラストを描いて、追加していただいた。ここをさっさと流されたら、もったいないと思うので、時間をかけて表示するべきではないかと思う。そうすると、10分で忙しなくなるか気になる。ボリュームとしてはどうなのだろうか。

(事務局)

大体1分間で300文字が目安になっているので、10分だと3000文字ぐらいの文字数で考えるべきかと思う。スライドが15枚で、平均すると1枚1分未満で話をさせていただくことになるので、やや全体としてはきついかと思う。最初の方は前置きなので、少し軽めに説明して、取組の方向性や、芸術マルシェについて重点を置いて説明することで調整する必要があるかもしれない。10分以内とシビアに捉えず、10分程度という認識で良いと思う。

(参加者)

10分の中で一番私たちが伝えたいのはどこかということになると思う。前段の背景や問題点の説明が長くなって、芸術マルシェの開催意図の説明が薄くなるよりは、芸術マルシェの説明に重きを置いた方が良いと思う。

(参加者)

スライドにあまり多くの情報を詰め込むと見づらくなる。2ページ、3ページは分かりやすくグラフを出してあるし、問題点に関する部分はさらっと30秒ぐらいでいけると思う。先ほどもお話があったが、コンパクトにするという意味で言えば、5ページと6ページにコンセプトが二つあり、内容もややアバウトなので、説明をしっかりとしなければ何も伝わらないと思う。どちらかに絞ることで、その後のマルシェについて話す時間を取ることができるかもしれない。

(参加者)

コンセプトは一つにまとまらないだろうか。どちらにも文化、文化、文化とあるので、まとめられたらコンセプトととして、バーンと打ち出せる。

(参加者)

コンセプト①の「暮らしに文化、デートも文化」は、市民芸術マルシェをやることによって、文化というのが日常に浸透していくという意味でつじつまが合う。2 番目のコンセプトは抜いても大丈夫なのかなと思う。

→ 賛同意見あり

(参加者)

②がその後のスライドにつながるかというと、そうではないという気もする。

(参加者)

「デートも文化」というのはどういう意味だったか。

(事務局)

「暮らしに文化」はカジュアルな場面で文化があるということで、「デートも文化」はそれよりも少し特別な、フォーマルな場面でも文化に触れてほしいということとして、分けがあるのかなと思う。

(参加者)

この後、具体的な取組と芸術マルシェの話をするときに、世界とつながるかということ、私たちが出している取組があまりグローバルな感じはない。まずは旭川で知ってもらって、旭川で発表していくものだと思う。

(参加者)

マルシェを継続してやっていくことで、世界に発信していく機会ができるということはある得るのかもしれないが、世界に発信するために始めるわけではないと思う。

(事務局)

「世界」というのは、会議の中でアフガニスタンで文化芸術活動が禁じられているというお話があったので、「世界の」と入っているが、一部の人だけで盛り上がるのではなく、誰でも参加でき、誰もが取り残されないようにするべきというその後の御意見も踏まえ、外国人ということに限らず、文化を通じて多様な人達がコミュニケーションを取れるということを意味する内容で説明している。

(参加者)

10 分の間に、それが言えるかというとそうではないと思う。

(参加者)

欲張らないで、まず食べマルシェみたいな、暮らしや日常にすぐつながる範囲で始めたら良いと思う。

(参加者)

コンセプト①で良いと思う。コンセプト②は私の発言が元になっているが、プレゼン資料に載らなくても、議事録として裏では色々議論されたということが残るので、良いのではないだろうか。

(参加者)

コンセプトは①にして「デートも文化」という言葉をそのまま使うかどうかだ。

私たちが会議を通して一番大事にしていることは、とにかく敷居を下げることで、「暮らしに文化」と表されている部分だと思う。敷居を下げて、いつも生活の中に文化があるというところが目指すところかと思う。

(参加者)

少し特別な日にも文化に触れる、少し特別な日が「デート」の意味だとすると、「デートも文化」は芸術マルシェにあまりつながっていかないのでは、違う言葉にするか、切ってしまうか考えても良いと思う。

(参加者)

私たちですら「デートも文化」をどう理解するかはいろいろなので、真意が伝わるだろうか。

(参加者)

デートに文化というとクラシックのコンサートにちょっときれいな格好をして行くとか、美術館に行くとか、そのような特別な日をイメージすると思います。

(参加者)

そうすると、逆に敷居が高いイメージになってしまう。先日、ウクライナのパレエを鑑賞してきたが、旭川市民の方たちは東京の方たちと感覚の違いがすごくあるなと思った。クラシックがまだ身近にない感じなので、デートにクラシックを入れてしまうと、本当に敷居が高くなってしまう。

※ コンセプトである「デートに文化」の代替案についてのディスカッションを行い、以下の案が出された。

- ・ 公園でも文化、酒場でも文化
- ・ ストリートカルチャー、道端でカルチャー
- ・ 隣に文化、暮らしに文化
- ・ 誰もが文化、みんなが文化
- ・ 暮らしに文化、みんなに文化
- ・ 暮らしに文化、まちなか文化
- ・ いつでも文化

結論が出なかったため、ひとまず後回しとしつつ、コンセプト②はカットすることとなった。

(参加者)

取組の方向性について、いくつか意見がある。

「情報発信の強化」と「分かりやすく伝える工夫」という言葉が似ている感じがする。「文化芸術の魅力伝える工夫」の方が良いと思う。「アーティストの交流促進」については、「アーティスト」という言葉が有名なアーティストを指すようなイメージがある。芸術文化を愛している人、やりたい人たちの交流促進を意味するなら、文化芸術活動団体の交流促進にしたらどうだろうか。

「情報発信の強化」の取組例について、今まで、敷居が高い、誰もが気軽に触れ合える場にと

話し合ってきたのに「インパクトを与える有名アーティストの招へい」はそぐわないと思う。「情報発信の強化」をするためには、興味がある人だけではなく、興味がない人にも知れ渡るような宣伝の仕方をして、情報を伝えていこうというコンセプトがここに一つ入っていれば足りるので、「有名アーティストの招へい」はなくても良いと思う。

(参加者)

インパクトを与えるような有名な方を呼ぶことで、「旭川って、こんな人を呼んですごい」という情報発信はできると思うが、芸術マルシェを自分たちで作っていきこうとなったときに、これはイメージとずれるのかもしれない。

(参加者)

敷居を下げて、門戸を広げるということであれば、削ったほうが良いかもしれない。

(参加者)

「情報発信の強化」については、三つに絞っていくということにして、「施設の整備」についてはどうか。十分な練習場所の確保とか、お客さんに見せるための設備が整ってなかったりとか、そこに補修経費をかけてほしいとか。

(参加者)

「まちなかぶんか小屋のような小さな発表の場」というより、もっと良い発表の場を作してほしい。具体的には、文化会館の小ホールよりも客席数が少ない、小さい団体でも安く使える場を作るとしたほうが良いと思う。「施設の整備」という言葉ではなく、空き民家を自由に使えるようにして練習場所を確保したり、活動の場の充実をしてほしい。「記念館の創設」というのも少し唐突な気がする。

(参加者)

全て含めて様々なジャンルの文化を紹介する場の創設ということだと思う。そうすると意味が広くなる。「まちなかぶんか小屋のような小さな発表の場」というところは、活動場所の充実であるとか、発表や練習の場所の充実という言葉になっていくのだろうか。

(参加者)

まず、壊れている施設は直してほしいし、施設を利用するときの仕組みも改善してほしい。

(参加者)

文化会館の利用基準が曖昧だと思う。みんなが分かるように、システムが変わっていくことの整備が必要である。

(参加者)

市民の要望や声が届き反映される仕組みがあれば、すごく良い。

(参加者)

そうすると「施設の整備」というところは「活動の場の充実」とかになってくるだろうか。具体的な取組として、設備の補修、施設利用の仕組みづくり、小さな発表の場をつくるといったところか。

(参加者)

「記念館の創設」は、実は芸術マルシェにはつながらないかもしれない。

(参加者)

取組例の「小さな発表の場をつくる」は、「まちなかぶんか小屋」を消して、「誰もが発表しやすい場をつくる」にするか。

(参加者)

ジャンルを問わず、小さな団体でも使いやすい場ということだろうか。

(参加者)

ここで難しいのが、既存の施設でココデや木楽輪があると言われることだ。ただ、音楽以外は駄目だとか色々な制約があって使いにくい。

(参加者)

小規模の団体でも使用しやすい施設の創設としてはどうだろうか。

(参加者)

新しくできた団体が挑戦しやすい施設があると良い。一番小さいホールは文化会館の小ホールで、300席である。新しくできた団体にとっては大きすぎる。

(事務局)

小さい団体でも利用の敷居が低い、小規模の施設というイメージということか。

(参加者)

そのとおり、活動の場の充実というところだ。

次のページの「分かりやすく伝える工夫」は「魅力を伝える工夫」にしてはどうだろうか。

最後が「コラボレーション」で、文化芸術とコラボするというつくりになっている。取組の方向性については、この四つということでよいか。

- ① 情報発信の強化
- ② 活動の場の充実
- ③ 魅力を伝える工夫
- ④ コラボレーション

(参加者)

「魅力を伝える工夫」の取組例で、ワークショップという言葉を使った方が伝わりやすいのではないだろうか。

(参加者)

取組例の中で「魅力を伝える工夫」の部分だけが体言止めでないことに違和感がある。同じような文章表現の方が統一感が出る。「ワークショップの実施」とか、「見つめ直す」を「再発見」にしてはどうだろうか。

(事務局)

「作品の見方、聞き方などのポイントの解説」、「作品やイベントの制作過程を開示、体験しても

らうワークショップの実施」,「各々の文化芸術の魅力の再発見」といった言葉で良いだろうか。

(参加者)

順番は、ワークショップが1番目、再発見が2番目、ポイントの解説が3番目がいいと思う。

(参加者)

取組の最後の「アーティストの交流促進」は「文化芸術のコラボ促進」という言葉になると思う。

そして、これら四つの取組の方向性をもとにした具体的取組がこちらということで次の市民芸術マルシェの開催という流れになる。

(参加者)

「実施方法」を見ると、「プロジェクションマッピングの使用」や「自由に絵が描ける」とあるが、そうすると「事業内容」の中で、「参加者体験型のワークショップの実施」と表現するのは違うと思う。決して、体験型のワークショップをするわけではない。お芝居をしないでワークショップをするわけではない。

一番の目的は他団体との交流を実施することで、そのための実施手段の一つとして、ワークショップをしたりすることになるのだと思う。

芸術マルシェの開催の中身は、発表の場だったり、触れ合う場だったり、コラボだったり、ワークショップだったり、展示だったりいろいろなのではないだろうか。

(参加者)

ワークショップに限るかどうかは微妙だが、事業内容の枠を広げてしまうと、結局何をするのが分かりにくくなる。

(参加者)

イメージとしては、何でもできるような感じだと思う。参加者体験型のワークショップだけではないはずだ。芸術に触れあえる空間であって、その時間を作っていくということだと思う。イラストを見る限りそういう感じで、楽しそうにいろいろなことをやっている。敷居を下げて皆さんが参加できることだと思う。

(参加者)

実際、ワークショップ、発表、展示の三つが軸だろうか。各々の団体がやれることをやった上で、例えば露店を出しましょう、例えばプロジェクションマッピングを使いましょう、例えば絵を描けるようにしましょうということだが、これを全部いきなり、もりもりでやってしまうと難しいから、まずは小さいところからやりましょうということだが、今の「実施方法」からだ読み取りにくい。

実施方法として、各々の団体がそれぞれ発表、展示、ワークショップなどの活動を同時に行い、その上で今、実施方法として挙げられていることも考えられるとまとめると分かりやすくなると思う。

(事務局)

「事業内容」を「実施内容」に変更し、ワークショップのみではなく、発表、展示を加えた三

つが軸という形に修正ということで良いか。現在の「実施方法」は、イベントを盛り上げる工夫のようなイメージなので、分かりやすいように表記は変えた方が良いだろう。その上で、まなびピアなど既存の取組に組み入れていくという部分は運営の話なので、留意事項の欄に移動した方が良いだろう。

(参加者)

説明としては、「構想の実現には具体的な条件を整える時間とお金が必要なので、まずは2030年までに、最初は小規模でも、一部でも、この要素を加えたイベントを開催することを目指す。そのときは、まなびピアのような既存の取組への組入れを検討しつつ、毎年継続していく中で、誰でも参加できる、多くの市民が楽しんでいただける芸術マルシェを、旭川市と市民の力で育てていく。この取組が旭川で文化が日常に浸透していき、分け隔てなく多くの人の心を文化が輝かす、このように考えている。」という感じで考えている。

(参加者)

12ページの「効果」のところの順番だが、「文化芸術活動への理解促進や参加者の増加につながる。」を1番目に、「体験を通じてたくさんの人に活動の楽しさが共有される。」を2番目、『敷居が高く一步が踏み出しにくい』というイメージの打破。」を3番目にした方が良いと思う。

(参加者)

順番が変わるが、良いだろうか。

11ページは、「事業内容」を「実施内容」に変えていただいて、ワークショップだけではなく、発表や展示もあるということにして、「実施方法」が「例えば」とか「例」というかたちになる。

12ページは「効果」の順番を変えるだけで大丈夫だろうか。

(事務局)

「効果」の順番を変えると、目指すところが変わってくると思うがいかがであろうか。順番を変えると、芸術マルシェを行うことで参加者が増える、そこで楽しさが共有されて、敷居が下がるという順番になる。

(参加者)

敷居が高く一步が踏み出しにくいというのが解消されれば、「暮らしに文化」が達成されるということになってくる。

(事務局)

そうではなく、ホップ・ステップ・ジャンプのようなイメージで、まずは敷居を下げた上で、最終的に理解促進や参加者増につなげたいという大目標に向かっていくというだと思うので、最初の順番で良いのではないだろうか。

(参加者)

なるほど。楽しさが共有されて、イメージが打破されて、文化芸術への理解が促進されるということによって、最初の問題点が解決されるという順番である。団体の高齢化が進んでいたり、文化芸術が盛んなまちだと感じられていないということだったが、芸術マルシェを開催することで、こんな効果がありますということだ。

(参加者)

最初の順番で良いと思う。

(事務局)

順番はこのままにさせていただく。

(参加者)

発表の際に一番時間をかけるのは、11ページと12ページだと思う。

(参加者)

「敷居が高く一步が踏み出しにくい」イメージというのが問題点の中にあるのだろうか。

(参加者)

そういうイメージがあるからこそ、盛んだと感じられていないという3ページの問題点があったのだが、どうだろうか。市民に十分に浸透していないという問題提起があった。

(参加者)

「馴染みが薄く、敷居の高いイメージがついている」と4ページにある。

(参加者)

これはどこかにデータがあるのかと言われれば、ない。

(参加者)

そうならば、これは言葉どおりに「一步が踏み出しにくい」かどうかは分からない。馴染みが薄いということだと思う。知らないことを知ろうとしていないということではないか。敷居が高いと感じるか、そうでないかは、またイメージの話になってしまう。

「馴染みが薄く、敷居の高いイメージを打破」ということだと思う。

(参加者)

打破されて、暮らしに文化が浸透していくということだ。

(参加者)

まとめに記載している「関心のない市民」は、少し言葉が強いので、馴染みの薄い市民にしてはどうだろうか。

(参加者)

「特に若年層」というのも取って良いと思う。データ上では、関心の有無について、特別に記載するほど大きな年齢層による差はない。

保留だったコンセプトだが、「暮らしに文化」だけで良いか。それとも「暮らしに文化、みんなに文化」のように何か付けた方が良いだろうか。

(参加者)

「未来に文化」ではないだろうか。未来の芽を育てていこうと、最後のイラストのページにある。

(参加者)

「デートも文化」がなくなったので、説明文のなかの「少し特別な日にも触れてもらえるようなまちになるよう」は取った方が良いと思う。

(参加者)

最後のイラストの位置はどうしたらよいか。芸術マルシェの説明の前に持ってきて、まずは目指すイメージを紹介した上で取組内容の説明につなげる流れでも良いと思う。

(事務局)

芸術マルシェはあくまで目標に向けた手段なので、その先の展望を印象づける締めイラストとして最後にある方が良いのではないだろうか。

→ 異議なし

※ 最後に、本日の議論で決まった報告書の修正箇所について、全体を再確認し終了。

以上